神戸女子短期大学　論攷　56巻　9 －18（2011）

－原　著－

幼児の野菜生長認識と幼児及び保護者の食に関わる態度との関連性

廣　　陽子　　庄司圭子

The relationship between recognition of growth of vegetables, and the attitude toward food by children and the parents

Yoko HIROSHI,　Keiko SHOJI

要　旨

近年の幼児の食に対する意識や行動，態度に関わる研究動向は，保護者評価が中心として展開されている。しかし，幼児でも容易に回答可能な野菜や果物の生長認識クイズを用いることで，幼児の食を巡る態度や能力を育む背景をより明確に把握することが可能であると考える。本研究は幼児自身の回答によって得られた野菜生長認識と保護者評価による幼児及び保護者自身の食に関わる態度との関連性を検討することによって，幼児への保護者の影響性を実証的に明らかにし，今後の保育現場での食育活動の視点を考察することを目的とした。その結果，幼児の野菜生長認識は幼児自身の「食への興味・関心」と保護者の「食に関わる態度」に関連性が認められた。また，特に，幼児の「食への興味・関心」と保護者の「食に関わる態度」や，幼児の「食に関わる態度」と保護者の「子どもに対する食教育の推進」の関連性が明らかになった。このことから，今後の保育現場での食育活動を考える際には，目的に沿った食育活動によって得られる効果を踏まえ，幼児のみの食育活動の展開に留まるのではなく，幼児と保護者が共に食育活動に参加し，双方の食に対する態度の向上につなげる必要性が示唆された。

キーワード：幼児
保護者
野菜生長認識
食に関わる態度

Ⅰ　はじめに

2005年に「食育基本法」[1)]が施行されて以来，国を挙げての食育推進[2)]が行われ，特に幼児期における食育の重要性が謳われるようになった。以前は，幼児期の食育は主に家庭で育まれ，保育現場においても，生活の中での食との関わりとして取り組んでいた。しかし，食事情の急速な変容に伴い[3)]，主に家庭だけでの食育は困難となり，保育現場と連携しながら進めて

いかなければならないのが現状である。幼児の食は保護者に依存しているため，保護者の食への考えや態度が直接幼児の食に影響することは言うまでもない。今後，幼児の食育の目標である「食を営む力」の基礎を培うためには，保育現場と家庭と連携を充分に行うことが不可欠であるといってもよい[4) 5)]。

幼児の食への興味・関心や食意識や行動，態度に関わる研究動向は，保護者評価が中心として展開されている。こうした調査方法の背景には，幼児期の自記式質問紙による回答が困難であること，インタビュー調査においても回答結果の信憑性に課題が存在する等，発達段階の問題が存在するためである。筆者らは，幼児でも容易に回答可能な野菜や果物の生長認識クイズ[6)]を用い，親子の正解得点に関連性があることを明らかにした[7)]。しかしながら，幼児の野菜生長認識を高める家庭状況の背景については検討していない。幼児の野菜の生長認識の高低は，当然，保護者の養育姿勢や生活環境要因の関与が想定される。筆者らの問題意識は，これまでの保護者評価間による関連性の検討ではなく，幼児自身から得られたデータと保護者データの関連にある。つまり，幼児自身の回答と保護者評価による幼児と保護者の食に関わる家庭状況が関連したとき，幼児の食を巡る態度や能力を育む背景をより明確に把握することが可能であると考える。

そこで，本研究は，幼児自身の回答によって得られた野菜生長認識と，幼児及び保護者の「食に関わる態度」尺度を用い，それらの関連性について分析を行い，保護者の影響性を実証的に明らかにするとともに，今後の保育現場における食育活動の視点を考察することを目的とする。

Ⅱ　方法

1．調査対象

兵庫県下公立幼稚園6園に通う園児（4・5歳児），計392名とその保護者を対象とした。

2．調査期間と調査方法

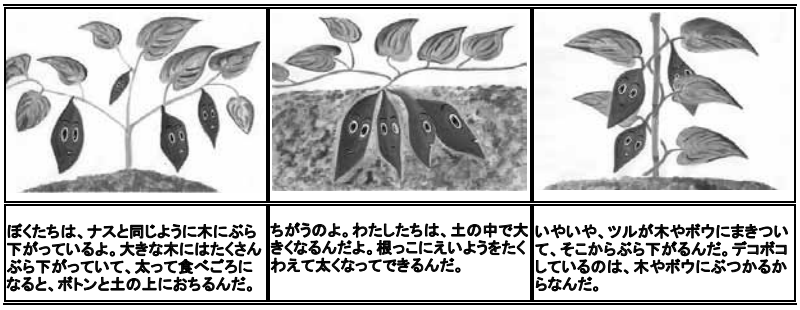
2008年5月中旬～6月上旬にかけて保護者を対象に質問紙調査を実施した。幼稚園担任教諭を通して，質問紙の配布回収を行なった。有効回答率は96％であった。

3．調査内容

(1)　野菜生長クイズ

幼児の野菜生長認識度の把握は，近畿農政局　消費・安全部消費生活科食育担当『野菜のできかたクイズ』(10問3択：さつま芋，南瓜，茄子，ブロッコリー，里芋，苺，大根，白菜，落花生，とうもろこし）を用い，保護者から幼児に図案を提示し，インタビューによって回答を求めた[8)]。なお，家庭でのインタビューについては，保護者と幼児が1対1になり図案を幼児に見せ，クイズ形式で回答を求めた。

「さつまいも」はどんなふうにできるのかな？？



せいかいはどれでしょう。絵をクリックしてね。

図１　野菜生長クイズ図版　（例　さつまいも）

(2)　幼児及び保護者の態度尺度の作成

１）幼児の食にかかわる態度尺度の分析

まず，幼児の食に関わる態度を尺度化するために，保護者392名に質問を行い（「非常に当てはまる」を５点～「全く当てはまらない」１点），それを得点化し，得点を基に因子分析を行った。

因子分析を行う前段階として，幼児の食に関わる態度30項目の平均値，標準偏差を算出し，天井効果およびフロア効果が著しく見られた６項目を以降の分析から除外した。次に残りの23項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ，4因子構造が妥当であると考えられた。そこで，再度４因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果，因子負荷量の減衰状態や因子の解釈可能性を考慮に入れながら，妥当でないと判断した９項目

表１　幼児の食に関わる態度尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
日頃の生活の中で、野菜に興味・関心を持っている	**0.80**	−0.03	−0.03	0.00	0.65
健康と食べ物の関係に関心をもっている	**0.76**	−0.01	0.03	0.03	0.59
食材に関わる人や、料理をする人に関心を持っている	**0.66**	0.02	−0.02	−0.02	0.43
食事中に子供から食べ物と体の関係についての質問がある	**0.62**	−0.07	−0.05	0.07	0.42
知らない野菜があると名前を尋ねる	**0.61**	0.04	0.08	−0.03	0.36
食事の準備や片付けに参加したがる	**0.41**	0.13	−0.06	−0.01	0.25
友だちと一緒に食事を楽しむ	−0.15	**0.85**	−0.01	0.09	0.67
家族以外の人と一緒に食事を楽しむ	−0.03	**0.81**	0.02	−0.04	0.61
家族と一緒に食事を楽しむ	0.18	**0.56**	−0.09	0.00	0.48
食事中に会話を楽しむ	0.19	**0.53**	0.07	−0.07	0.36
食事に遊んだり、立ったり、集中できない	0.00	0.03	**0.75**	−0.05	0.59
食事の時の姿勢が悪い	0.00	−0.02	**0.71**	0.05	0.48
食べものを大切にし，残さず食べようとする	−0.04	−0.01	−0.06	**0.79**	0.62
食べ慣れないものや・嫌いでも少しずつ食べようとする	0.14	0.02	0.08	**0.68**	0.56
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
Ⅰ	—	0.45	−0.31	0.59	
Ⅱ		—	−0.24	0.34	
Ⅲ			—	−0.45	
Ⅳ				—	
因子寄与	4.30	1.29	0.99	0.50	
寄与率	30.69	9.18	7.01	3.56	

を分析から除外し，再度，主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表１に示す。

抽出させた４つの因子については，次のように命名した。

第１因子は，６項目で構成されており，野菜や食べ物と体，食材や料理といった「食」に対しての興味・関心についての項目が高く負荷していることから，「食への興味・関心」因子と命名した。

第２因子は，４項目で構成されており食事を楽しむ項目が高く負荷していることから，「共食歓楽」因子と命名した。

第３因子は，２項目で構成されており食事中の注意力が欠ける事柄の項目が高く負荷していることから，「食事時の注意散漫」因子と命名した。

第４因子は，２項目で構成されており積極的に食事に取り組む行動の項目が高く負荷していることから，「積極的摂取行動」因子と命名した。

２）下位尺度間の関連

幼児の食に関わる態度尺度の４つの下位尺度（食への興味・関心，共食歓楽，食事時の注意散漫，積極的摂取行動）に相当する項目の合計得点を算出し，それぞれの下位尺度得点とした。内的整合性を検討するために，下位尺度のα係数を算出したところ，食への興味・関心因子（α＝0.817），共食歓楽因子（α＝0.793），食事時の注意散漫因子（α＝0.698），積極的摂取行動因子（α＝0.793）を採択した

幼児の食に関わる態度の下位尺度間相関について，４つの下位尺度は互いに有意な相関を示した。（表２）

表２　幼児の食に関わる態度尺度の下位尺度間相関

	食への興味関心	共食歓楽	食事時の注意散漫	積極的摂取行動	平均得点	SD	α係数
食への興味関心	—	0.40 ***	−0.24 ***	0.50 ***	21.23	4.60	0.82
共食歓楽		—	−0.19 ***	0.29 ***	16.64	2.73	0.79
食事時の注意散漫			—	−0.32 ***	5.45	1.94	0.70
積極的摂取行動				—	6.80	2.07	0.79

***：p＜0.001

３）保護者の食にかかわる態度尺度の分析

前項と同様に，保護者の食に関わる態度を尺度化するために，保護者392名に質問を行い，それを得点化し，得点を基に因子分析を行った。

因子分析を行う前段階として，保護者の食に関わる態度40項目の平均値，標準偏差を算出し，天井効果およびフロア効果が著しく見られた11項目を以降の分析から除外した。次に残りの29項目に対して主因子法による因子分析を行ところ，５因子構造が妥当であると考えられた。そこで，再度4因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果，因子負荷量の減衰状態や因子の解釈可能性を考慮に入れながら，妥当でないと判断した６

項目を分析から除外し，再度，主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 3 に示す。

抽出させた 5 つの因子については，次のように命名した。

第 1 因子は， 5 項目で構成されており，食事や食卓を尊重し，家族との関わりを大切にしている項目が高く負荷していることから，「家族の団欒尊重」因子と命名した。

第 2 因子は， 6 項目で構成されており自ら食を楽しみ，家族への食を考え提供する意識項目が高く負荷していることから，「家族の食への配慮」因子と命名した。

第 3 因子は， 7 項目で構成されており子どもへの食教育のための行動の項目が高く負荷していることから，「子どもに対する食教育推進」因子と命名した。

第 4 因子は， 3 項目で構成されており食卓の見た目や工夫の配慮の項目が高く負荷していることから，「食事提供の工夫」因子と命名した。

第 5 因子は， 2 項目で構成されておりわが子の偏食を軽減の工夫の項目が高く負荷していることから，「子どもの偏食に対する工夫」因子と命名した。

表 3　保護者の食に関わる態度尺度の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	共通性
食事を通じて家族の絆を深めたい	**0.84**	0.11	−0.15	−0.03	0.08	0.73
食卓は，集まる人の心が癒される場である	**0.84**	−0.02	0.02	0.01	−0.07	0.67
食事の時間を大切にしたい	**0.82**	0.00	0.03	−0.06	0.05	0.69
食卓は子どもの心を育てる場だと考える	**0.63**	−0.08	0.22	0.10	−0.04	0.58
食事時に子どもと会話がはずむように心がけている	**0.36**	0.10	0.14	0.05	0.05	0.34
料理をするのは楽しい	0.06	**0.93**	−0.11	−0.16	0.00	0.66
料理をすることに自信がある	0.04	**0.88**	−0.07	−0.03	−0.14	0.58
子どもの誕生日には腕によりをかけて料理をしたい	0.04	**0.65**	−0.07	0.08	0.04	0.49
旬の食材を使いで季節感を楽しむ	−0.02	**0.51**	0.13	0.05	0.12	0.51
季節の行事・節句を食事に取り入れている	−0.15	**0.48**	0.13	0.28	−0.03	0.47
我が家の味というものを大切にしたい	0.27	**0.41**	0.06	0.11	−0.04	0.46
子どもと一緒に買物に行くことは、多くの学習機会であり有効だ	0.13	−0.06	**0.62**	−0.02	−0.11	0.34
子どもと一緒に料理する	−0.16	0.29	**0.61**	−0.14	−0.02	0.45
食事づくりや準備に子どもを参加させることは必要	0.00	−0.05	**0.60**	0.01	−0.04	0.23
子どもに「いただきます・ご馳走様」の意味を伝える	0.18	0.00	**0.48**	−0.04	0.00	0.33
子どもに食品の栄養価について話す	0.04	−0.08	**0.45**	0.09	0.08	0.28
子どもによくかんで食べるように促す	0.05	−0.14	**0.44**	0.06	0.05	0.21
子どもに色々な食材にふれさせている	−0.09	0.25	**0.44**	−0.09	0.15	0.43
食事に器は大切	0.07	−0.05	0.04	**0.83**	−0.11	0.65
おいしさには料理の盛り付けや彩りなどは影響する	−0.03	−0.01	−0.08	**0.83**	0.08	0.66
食卓が楽しくなるような料理の盛り付けなどは影響する	−0.02	0.26	0.07	**0.37**	0.19	0.55
子どもの嫌いな食材は調理を工夫する	0.00	−0.06	−0.06	0.05	**0.86**	0.68
子どもの好き嫌いを減らすように工夫する	0.04	0.00	0.04	−0.08	**0.84**	0.71
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	
Ⅰ	—	0.47	0.52	0.55	0.47	
Ⅱ		—	0.66	0.56	0.66	
Ⅲ			—	0.57	0.62	
Ⅳ				—	0.62	
Ⅴ					—	
因子寄与	7.98	1.55	0.87	0.76	0.58	
寄与率	34.67	6.74	3.79	3.32	2.52	

4）下位尺度間の関連

保護者の食に関わる態度尺度の 5 つの下位尺度（家族の団欒尊重・家族の食への配慮・子どもに対する食教育推進・食事提供の工夫・子どもの偏食に対する工夫）に相当する項目の合計得点を算出し，それぞれの下位尺度得点とした。内的整合性を検討するために，下位尺度の α

表４　保護者の食に関わる態度尺度の下位尺度間相関

	家族の団欒尊重	家族の食への配慮	子どもに対する食教育推進	食事提供の工夫	子どもの偏食に対する工夫	平均得点	SD	α係数
家族の団欒尊重	—	0.52 ***	0.51 ***	0.53 ***	0.46 ***	20.90	2.99	0.86
家族の食への配慮		—	0.59 ***	0.59 ***	0.55 ***	23.20	4.05	0.85
子どもに対する食教育推進			—	0.50 ***	0.50 ***	27.11	3.90	0.74
食事提供の工夫				—	0.44 ***	11.68	2.08	0.79
子どもの偏食に対する工夫					—	7.87	1.47	0.81

***：p＜0.001

係数を算出したところ，家族の団欒尊重因子（α＝0.860），家族の食への配慮因子（α＝0.845），子どもに対する食教育推進因子（α＝0.741），食事提供の工夫因子（α＝0.786），子どもの偏食に対する工夫因子（α＝0.811）を採択した

保護者の食に関わる態度の下位尺度間相関について，５つの下位尺度は互いに有意な相関を示した。（表４）

４．分析の手続き

幼児が回答した野菜生長認識クイズ10問について，正解を加算集計（以下，正答得点とする）した（図２）。幼児及び保護者の食にかかわる態度尺度の質問項目は５件法で回答を求め，「非常に当てはまる」を５点～「全く当てはまらない」１点として得点化し，幼児，保護者の下位尺度別に加算集計を行い分析に用いた。

正答得点と幼児及び保護者の食にかかわる態度尺度の下位尺度別の関連性を検討するため Pearson の積率相関係数を算出した。次に，幼児と保護者の関連性を検討するために，幼児及び保護者の食にかかわる態度尺度の下位尺度別に Pearson の積率相関係数を算出した。

なお，性別については有意差が認められなかった為，すべてのデータを合算して分析を行った。

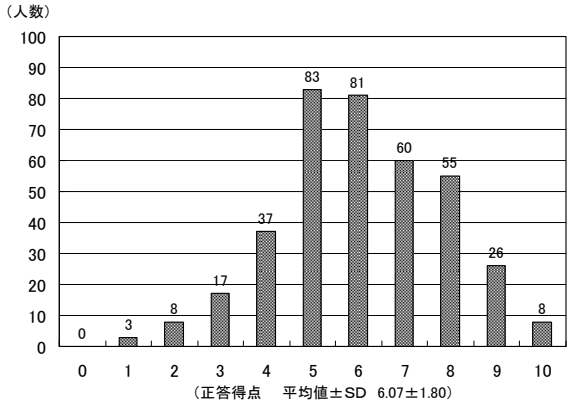


図２　幼児の野菜生長クイズ正答得点の分布

Ⅲ　結　果

１．幼児の野菜正答得点と幼児及び保護者の食に関わる態度との相互関連性

幼児自身が回答した野菜生長認識の正答得点と保護者評価による幼児と保護者の「食に関わる態度」尺度との関連性について検討する。

表５に示す通り，正答得点と幼児の食に関わる態度尺度では，①「食への興味・関心」因子のみに有意差（r＝0.14　p＜0.01）が認められた。すなわち，野菜の生長認識の高い幼児は「日頃の生活の中で，野菜に興味・関心を持っている」や「健康と食べ物に関心がある」「食材や料理する人に関心がある」といった，食に関わることへの興味・関心が高いことが明らかになった。また，他の因子においては有意差が認められず，相関係数も低い値を示した。

一方，保護者の食に関わる態度尺度では，①③④は１％水準（① r＝0.11③ r＝0.21④ r＝0.20　p＜0.01），②⑤は５％水準（② r＝0.16　r＝0.11　p＜0.05）とすべての因子に有意差が認められた。このことから，幼児の野菜成長認識の高さは，保護者の食卓を通しての家族への関わりを大切にすることや，子どもへの食教育の充実，食事提供の工夫といった行動や意識の高さと相互に結びついていることが明確になった。中でも保護者の食に関わる態度のうち③「子どもに対する食教育推進」④「食事提供の工夫」の関連性が他の因子より強い相関であるという結果となった。

表５　正答得点と幼児及び保護者の食に関わる態度との相互関連性

		下位尺度	幼児の野菜正答得点	
食に関する態度尺度	幼児	①食への興味・関心	0.14	**
		②共食歓楽	0.05	n.s
		③食事時の注意散漫	−0.08	n.s
		④積極的摂取行動	0.02	n.s
	保護者	①家族団欒尊重	0.11	**
		②家族の食への配慮	0.16	*
		③子どもに対する食教育推進	0.21	**
		④食事提供の工夫	0.20	**
		⑤子どもの偏食に対する工夫	0.11	*

*:p＜0.05　**:p＜0.01

２．幼児及び保護者の食に関わる態度との相互関連性

因子分析より得た，保護者評価による幼児の食に関わる態度尺度及び保護者の食に関わる態度尺度を各下位尺度間で関連性を検討した結果，すべての下位尺度間で有意な相互関連性が認められた（表６）。

特に，幼児の食に関わる態度「食への興味・関心」因子と保護者の「食に関わる態度」すべての因子において，比較的強い関連性があることが確認された。また，保護者の食に関わる態

表 6　幼児と保護者の食に関わる態度尺度間の相互関連性

		保護者				
		家族の団欒尊重	家族の食への配慮	子どもに対する食教育推進	食事提供の工夫	子どもの偏食に対する工夫
幼児	食への興味関心	0.35 ***	0.38 ***	0.53 ***	0.38 ***	0.38 ***
	共食歓楽	0.38 ***	0.29 ***	0.36 ***	0.25 ***	0.24 ***
	食事時の注意散漫	−0.19 ***	−0.19 ***	−0.24 ***	−0.17 **	−0.20 ***
	積極的摂取行動	0.26 ***	0.25 ***	0.37 ***	0.23 ***	0.29 ***

**:p＜0.01　***:p＜0.001

度の因子のなかでも「子どもに対する食教育推進」と幼児の「食に関わる態度」尺度のすべての因子においても同様の結果となった。すなわち，食に関わる態度が高い保護者に養育された幼児は「食への興味・関心」が高いこと，また,「子どもに対する食教育推進」が高い保護者に養育された幼児は「食に関わる態度」が高い結果となった。

Ⅳ　考　察

以上の結果より，幼児の野菜生長認識は，幼児自身が「食への興味・関心」因子が高いほど，認識が高いことが明らかとなった。このことから，幼児自身の「食への興味・関心」を高めるためには，幼児の発育発達に沿った体験重視[9)]を主とした日頃からの食物や体についての探究心を抱かせ，食事の準備や片付けの習慣化ができるような環境設定を行うことが必要であると考える。保育現場においては，野菜の生長認識の知識の教授を行うことに留まらず，野菜栽培やクッキングといった実体験を取り入れた食育活動が幼児の「食への興味・関心」につながると考える。また，保護者の「食に関わる態度」のすべてが幼児の野菜生長認識との関連が明らかになったことから，保護者の家庭における食の在り方，食に対する意識や行動が幼児の野菜生長認識と関連があることがわかった。このことを踏まえ，保育現場での保護者向けの食育活動は，食に関わる態度が低い家庭に対しては，幼児との食を通しての関わりの重要性や保護者自身の食に関わる意識や行動の向上に努めることができるような啓発や支援が重要な視点であると考える。

そして，なかでも，幼児の「食への興味・関心」と保護者の「食に関わる態度」，また，幼児の「食に関わる態度」と保護者の「子どもに対する食教育推進」が比較的強い関連性が明らかになった。このことから，保育現場においては，幼児の「食への興味・関心」を高めるためには保護者の食に関わる態度が向上する食育活動を行う必要がある。具体的な保育現場においての食育活動は幼児のみではなく保護者と一緒にクッキングや野菜栽培を行うことにより，幼

児と保護者が食に対する共通の思いをもち，それを家庭に持ち帰ることでより発展することできる。また，保育現場での食育活動を知ることは，保護者が子どもに対して食教育の方法を知ることにつながり，幼児の「食に関わる態度」を高めることにつながると考える。すなわち，幼児のみの食育活動ではなく，保護者と共に食育活動を行い，保護者自身の食に対する態度の向上につなげる必要性が示唆された。

Ⅴ　まとめ

これまでの研究動向は，保護者評価間による関連性検討が主流であったが，本研究は幼児自身の回答データを基準として展開した。その結果，幼児の野菜生長認識と幼児の食に関わる態度の下位尺度である「食への興味・関心」及び，保護者の「食に関わる態度」（全因子）に有意な関連性が認められた。このことから，保護者の食に関わる養育態度が幼児に及ぼす影響があることを実証的に捉えることができた。

今回の結果で特徴的な点として，幼児の「食への興味・関心」と保護者の「食に関わる態度」因子すべてに関連性が認められたことから，今後の保育現場での幼児の食育を考える際は，幼児のみの食育展開ではなく，保護者を巻き込み，保護者自身の食に対する態度の向上につなげる必要性が示唆された。しかし，保育現場において，食育活動は広義にわたり様々な活動が行われているのが現状である。本研究結果でもあるように，幼児の野菜生長認識と食事の共食歓楽とは関連性がないことなどこれらを考慮し，食育活動は食に関わることに対し，幼児になってほしい姿，すなわち目的を示し，計画的な活動内容を考えることが必要であろう。

本研究は幼児自身が容易に回答出来る図案（10項目）を用い，野菜生長認識を基調に分析を行った。しかし，幼児の住居環境や生活環境，保育現場での栽培活動の差異について詳細な分析を行っていないため，幼児の回答に偏りがあることが考えられる。このことは，今後の研究課題とし研究を継続することとする。

謝　辞

本研究を行うにあたり，ご協力いただいた幼児，保護者，幼稚園教諭の皆様方に厚くお礼申しあげます。

引用　参考文献

1）内閣府：食育基本法，(2005)
2）内閣府：食育推進基本計画，(2006)
3）内閣府：食育白書，pp. 2-5，(2006)
4）厚生労働省：保育所保育指針，フレーベル館，pp. 236-240（2008）
5）文部科学省：幼稚園教育要領，フレーベル館，pp. 265-267（2008）
6）近畿農政局　消費・安全部消費生活科食育担当：野菜のできかたクイズ，(2007)
（http://www.kinki.maff.go.jp/introduction/syouhianzen/syutyoukouza/kuizu/kuizu1）

7）廣陽子　庄司桂子　嶋崎博嗣：幼児及び保護者の野菜生長認識に関する一考察，兵庫教育大学幼年教育コース『幼年児童教育研究』，第22号　pp. 139-144，2010
8）近畿農政局　消費・安全部消費生活科食育担当：前掲書　6）
9）厚生労働省：前掲書　4），pp. 222-225